

シナイモツゴを復元した里親小学校の取り組み

NPO 法人シナイモツゴ郷の会 安住 芳朗

1. シナイモツゴ里親制度の発足と里親校

鹿島台小学校の取り組みを原型として、当会は2005年にシナイモツゴ里親制度を発足させ、規約を制定した。里親としては個人の飼育者や生息池の所有者・管理者も含めているが、中核として位置づけたのは学校の里親活動である。学校の目的と役割を明確にすることで、さらに里親となる学校を増やしたいという意図もあった。

この制度をもとに、鹿島台地区以外にもシナイモツゴを発眼卵から飼育する学校が現れ、仙台市や石巻市などの小学校も参加した。学校の統廃合などにより中断した学校もあるが、現在、鹿島台小学校、鳴瀬桜華小学校、小牛田小学校、石巻開北小学校の4校が継続して活動している。この4校の取り組みについて紹介する。

2. 大崎市立鹿島台小学校の取り組み

鹿島台小学校は当会の発足以前の2000年からシナイモツゴを飼育しており、2002年からはシナイモツゴの飼育と保護活動を総合的な学習の時間に位置づけ、シナイモツゴをテーマとしたカリキュラムを作成し、以降毎年、4年生がシナイモツゴについての学習に取り組んできた。

4年生の総合的な学習の時間は、地域の宝であるシナイモツゴの里親として飼育と保護活動をとおして地域を見つめ、そのよさを知り、地域を愛する心を育てながら、同じような絶滅危惧種の生き物がすむ宮城県や日本・世界の環境に目を向けさせることをねらいとして行っている。

活動は総合的な学習の時間に1年を通して行い、1年間の活動内容を3学期に3年生の前で、シナイモツゴの飼育の仕方や生態などを発表して、活動内容を引き継いでゆく形をとっている。

また、鹿島台小学校ではシナイモツゴの飼育や保護活動をとおして、社会科の環境に関連した学習や理科の四季を通した生き物の学習など、さまざまな学習へと発展させている。



鹿島台小学校での事前授業



鹿島台小学校飼育池にシナイモツゴの発眼卵投入

3. 鳴瀬桜華小学校の取り組み

鳴瀬桜華小学校の里親活動は、旧小野小学校と旧浜市小学校が統合される前の旧小野小学校時代の2005年から活動している。鳴瀬桜華小学校では総合的な学習の時間に、のりすきや、かきむき体験などの地域の特色を取り入れた活動を行っていて、その中の一つとして、シナイモツゴの飼育にも取り組んでいる。

この里親校も4年生の総合的な学習の時間の題材として、飼育活動に取り組んでいて、児童らはシナイモツゴの飼育と並行してシナイモツゴの歴史を学びその学びの中から当会の保護活動を知ること、郷土を愛する心を学ぶことになる。また、児童らのこのような活動が、シナイモツゴがつなぐ自然保護と地域交流になっている。

4 小牛田小学校の取り組み

小牛田小学校では、4年生児童が1年間のシナイモツゴ飼育活動から、2つのことを学んでいる。

1つ目はシナイモツゴを使い、児童の環境意識を高めることである。当会の里親インストラクターによる生態と飼育についての事前授業やシナイモツゴの飼育を体験することにより、環境の保全と復元を学び、その学びの中から児童たちは、まわりで起こっている環境問題にも目を向けられるようになってくる。

2つ目は生態系の物質循環を、シナイモツゴの飼育を通して実感することである。飼育池の中で繰り広げられる生態系の物質循環を目の当たりにすることにより、循環している地球の生態系の仕組みにも目を向けられるようになってゆく。

4 石巻開北小学校の取り組み

石巻開北小学校の里親活動は2010年から始まった。ところが翌年の2011年に東日本大震災が発生して、学校は浸水の被害を受けた。もちろんシナイモツゴの飼育水槽も海水が侵入して泥に覆われ、全ての魚は全滅してしまった。

石巻開北小学校では、学校再開とともに環境教育の土台整備を進め、次の年にはシナイモツゴの里親活動を再開できた。里親活動の授業への導入は、教諭で組織された理科部員が工夫して教育活動に取り入れている。また、里親活動は学校だよりや学年だよりで紹介していることもあり、地域の方々にも知られてきている。

5 里親活動についての総括

各里親校との関係については、里親活動を始める時期がどの学校も新学期の始まりで、行事などで大変忙しい時期であることから、活動日程の打ち合わせなどに難しいところもあるが、どの里親校も協力的でスムーズに行っている。これも今まで里親活動に関わっていただいた人々のつながりと、今まで行ってきた、里親活動の実績のたまものだと思う。このような形でこれからも活動が継続できるよう、学校との協力体制を維持し、さらに、より良いものにするよう努力して行く。

各里親校では総合的な学習の時間にシナイモツゴ取り上げてもらい、また、当会の目的である、シナイモツゴ生息池拡大に必要な稚魚の増殖では、児童に主役に関わってもらっている。児童が関わっているシナイモツゴの飼育という地域の自然保護活動が、児童や保護者を通して地域の人々や地域外の人々にも知られるようになってきた。また、里親活動の一環として行っている放流会は各報道機関の報道により、宮城県はもとより、他県までシナイモツゴの保護活動が知られるようになってきた。これもひとえに、児童が関わる里親活動のおかげと思っている。



鹿島台小学校4年生によるシナイモツゴ放流会

なお、里親活動の検討課題として取り組まなければならないのは、里親校飼育池などの稚魚生存率である。里親校で飼育されたシナイモツゴ成魚の回収数は、まだ里親校によってはばらつきがあることから、これを改善するため定期的に飼育池などを巡回し、飼育池などの環境把握に努め、環境状況に応じた飼育指導を実施し、稚魚の生存率を高めるようにして行きたい。



シナイモツゴの発眼卵



里親校飼育池のシナイモツゴの成魚